



1 小学校外国語教科化に向けて、文部科学省 直山 木綿子 視学官 来県！

- 令和元年12月3日（火）には、第3回ふくしま外国語教育推進リーダー協議会が開催されました。午前中は、県内14名の小学校英語専科教員である推進リーダーが、力を入れて取り組んだ今年度の授業実践を互いに紹介する機会となりました。これまで、各域内の授業公開の際には、他地区や中学校などから、多くの先生方に参加していただいたことにより、新学習指導要領の理念に則った授業づくりの具現化に向けて、深い協議をすることができているとのこと。また、中学校の先生方からのあたたかくも鋭い意見も頂き、実践的な小中連携が推進されているとの報告でした。

- 午後には、文部科学省から小学校英語を担当している直山木綿子（なおやま ゆうこ）先生（国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官 及び 学力調査官 並びに 初等中等教育局 視学官）をお招きし、小学校では次年度から全面実施される新学習指導要領に関する「学習評価」の在り方について、理解を深めました。この場には、上記の推進リーダーの他、各教育事務所の担当指導主事及び県内59市町村の担当者（任意参加）など、県内の多くの担当者が揃いました。



直山木綿子 視学官

- 講演とその後の質疑応答などの中で、特にポイントとなったことを以下に整理します。（全て、現時点での情報です）
 - ・ 評価について、いわゆる「参考資料」と呼ばれているものは、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（以下、参考資料という）」として、今年度中に配布されること。
 - ・ その参考資料は、以下のような骨子になっていること。

第1編 総説	第1章 平成29年度改訂を踏まえた学習評価の改善
	第2章 学習評価の基本的な流れ
第2編 各教科等における「内容のまとめりごとの評価規準」を作成する際の手順	第1章 国語・・・第10章 外国語
	第3編 単元(題材)ごとの学習評価について(事例) 各教科・・・ 外国語

- ・ 国は、例として学年ごとの目標と5領域の目標をつくるので、新学習指導要領にも記載されているとおり、各校で参考資料を基に、学年ごとの目標などを準備すること。
- ・ 指導と評価は表裏一体なので、授業をしっかりやれば、学習評価について過度に恐れる必要はないこと。
- ・ 十分に指導してから「記録に残す評価」をするので、単元の1～2時間目などでは、「記録に残す評価」はしないこと。（なお、3観点×5領域＝15個の評価情報については、学年末に評価を総括し、指導要録に記載する際に全ての評価情報が揃っていればよく、単元ごとに、全ての領域・観点について記録に残す評価を行う必要はない。ただし、各単元において、3観点をバランスよく見ることは重要：都道府県・指定都市 教育課程研究協議会における文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課外国語教育推進室長による行政説明から）
- ・ 自己評価及び相互評価は、学習活動の一環であること。
- ・ 1つの活動で、複数観点を見取ることは構わないこと。

- ・ 観点3(主体的に学習に取り組む態度)は、観点2(思考・判断・表現)と一体的に見取ることが多いこと。
 - ・ 観点3(主体的に学習に取り組む態度)は、単元1時間目の新しい教材に対してのいわゆる「食い付き」(興味や関心)を評価することではなく、単元1～2時間目などでは、見取くことは適切ではないこと。
 - ・ 小学校学習指導要領 p.157「2 内容[第5学年及び第6学年]の[知識及び技能]にける「(1)音声の特徴やきまりに関する事項」に記されている「音声」の特徴を捉えて話すことについては、それ自体を観点別評価の規準としないが、ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材を活用したり、デジタル教材等を活用したりして適切に指導を行うこと。
 - ・ 各校で採択教科書と、これまで活用してきた「We Can!」との共通点及び相違点を整理すると具体的なイメージが湧くこと。同じような言語材料の単元であれば、今までの教材研究が生きていること。異なる部分を中心に準備するとよいこと。
- なお、この参考資料につきましては、小中学校ともに、6月の暫定版(都道府県・指定都市指導主事連絡協議会版)については、各教育事務所又は市町村教育委員会等から、必要に応じて配付又は説明があったことと思います。今後、11月の暫定版(都道府県・指定都市教育課程研究協議会版)についても、情報提供できるように準備しているところです。今後とも、できるだけ早い情報提供を続けますので、各校で適宜御活用ください。

2

そもそも「パフォーマンステスト(又は評価:以下特に指定のない場合には、便宜的にテストとする)」とは?

- 特に小学校の先生方にとっては、もしかしたら「そもそもパフォーマンステストって何か?」と、確認したくなる言葉かもしれません。誤解を恐れずに端的に表現すると「実技テストのようなもの」です。そこで今回は、以下に簡潔に整理しましたので、各中学校での実践的な事例を参考に、まずはシンプルな形で取り組んでみてはどうでしょうか。

- 「ルーブリック」と聞くと難しく聞こえますが、「採点基準表」のようなものです。小学校の先生方は、中学校の先生方の実践的な資料を参考にしてみてください。

(1) パフォーマンス評価とは?

- 思考する必然性のある場面(文脈)で生み出される学習者のふるまいや作品(パフォーマンス)を手がかりに、概念の意味理解や知識・技能の総合的な活用力を質的に評価する方法である。
- 狭義には、現実的で真実味のある(「真正な(authentic)」)場面を設定するなど、学習者のパフォーマンスを引き出し実力を試す評価課題(パフォーマンス課題)を設定し、それに対する活動のプロセスや成果物を評価する、「パフォーマンス課題に基づく評価」を意味する。
- パフォーマンスの質(熟達度)を判断する評価指針(成功の度合いを示す3～5段階程度の尺度と、各段階の認識や行為の質的特徴の記述語や典型的な作品例を示した評価基準表)を **【チェック】ルーブリック**という。

※出典(抜粋): 2019.9 指導と評価(日本教育評価研究会)「特集パフォーマンス評価導入/パフォーマンス評価の提唱と拡大(京都大学准教授 石井英真)」

(2) 例えば、どのようなものですか?(各校における児童生徒の実態がありますが、小学校の一例、イメージです)

- 「外国人に向けて自分が紹介したい日本文化を伝える(**【チェック】パフォーマンス課題**におけるルーブリック) 」

視点1: 単元固有の評価

観点・能力	評価項目	評価規準	A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 努力を要する状態
知識・技能	学習結果や表現を使う	日本文化についてより伝えるための学習した語彙・表現を適切に使って話すことができる。	学習した語彙や表現に加え、日本文化について伝えるために、語彙表現を加えて話すことができた。	日本文化について伝えるために、学習した語彙・表現を適切に使って話すことができた。	学習した語彙・表現を使って日本文化を伝えることができなかった。
思考・判断・表現	考えの整理	伝えたいものを踏まえ、日本文化についての説明や感想を伝えるための補助的な資料を用意し、使おうとする。	伝えたいものを選んで、日本文化についての説明や感想を伝える形を整理して発表することができた。	伝えたいものを選んで、日本文化についての説明や感想を伝える形を整理して発表することができた。	お手本を使った発表しかできなかった。
主体的に学習に取り組む態度	学習の準備	発表する前に、相手に理解を促すための補助的な資料を用意し、使おうとする。	自分が選んだ日本文化をより分かりやすく伝えるために、複数の資料を駆使し、発表の内容に応じて話し方や指し示し方を工夫したりすることができた。	自分が選んだ日本文化に関する絵や写真、動画などを活用し、提示したり話し示したりしながら発表することができた。	発表することに適切な資料等を用意することができなかった。

視点2: プレゼンテーションそのものの評価

観点・能力	評価項目	評価規準	A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 努力を要する状態
知識・技能	流暢に話す	音と音のつながりやイントネーションを意識しながら最後まで話すことができる。	音のつながりやイントネーションを意識しながら最後まで話すことができた。	音のつながりやイントネーションを意識しながら最後まで話すことができた。	途中で止まってしまったり途中で話さなかった。
思考・判断・表現	文のまとまり	発表する事例を整理し、適切に音声を揃えながら話すことができる。	発表する事例を整理し、適切に音声を揃えながら話すことができた。	発表する事例を整理し、適切に音声を揃えながら話すことができた。	話し始めや終わりの挨拶がなかった。
主体的に学習に取り組む態度	発表の積極性	伝える相手の人数や状況に応じて目標を掲げたり話し合いやジェスチャーや表情を取り入れた発表ができた。	伝える相手の人数や状況に応じて目標を掲げたり話し合いやジェスチャーや表情を取り入れた発表ができた。	伝える相手の人数や状況に応じて目標を掲げたり話し合いやジェスチャーや表情を取り入れた発表ができた。	相手に目を向けていなかった。

- 難しく見えますが、以下のように簡潔な設定も考えられます。
設定 学期のまとめとして、3つの単元の既習事項を活用し、ALTとの1対1のやり取り(自己紹介)の中で、ALTの欲しいクリスマスプレゼントを聞き出す。
概要 名前と好きな色や好きな食べ物などをやり取り(原則ALTから)し、その後ALTの欲しいクリスマスプレゼントを聞き出す。もちろんALTからも聞き返す。
規準 [知・技]つかえることもあったが、最後までやり取りしている。[思・判・表]答える場面と聞き出す場面で、適切な英語でやり取りしている。[主態]ALTに配慮し、相手の理解を確かめようとしていたり、共感的に受け止める言葉を返そうとしていたりしている。
 ※各観点の取扱は2019.12.3の情報に基づいています。

※文部科学省の行政説明に合わせて、記載内容を修正している訳ではありません。

※出典(抜粋)2019.9 指導と評価(日本教育評価研究会)「特集パフォーマンス評価導入/小・中学校英語におけるパフォーマンス評価事例(関西学院大学教授 泉 恵美子)」